

義務教育段階の聴覚障害児における漢字の読み書き習得の困難とその要因に関する研究

茂木 成友（筑波大学 人間系 特任助教）

【研究の背景と目的】

近年、情報通信機器の普及に伴い常用漢字が増加するなど、社会生活において漢字使用の重要性は高まってきている。従来より、聴覚障害児者の社会参加において書きことばの活用が重要であるとされているが、とりわけ漢字の使用については、非常に重要となってきている。そこで本研究では、義務教育段階の聴覚障害児における漢字の読み書き習得の全般的な傾向【研究1】、漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因と認知要因【研究2】、日記文からみた聴覚障害児の漢字の書き習得の縦断的な変化【研究3】をそれぞれ明らかにすることを目的とした。

【研究1】聴覚障害児における漢字の読み書き習得の全般的な傾向

〔方法〕総合初等教育研究所（2005）を参考に、小学校第一学年から第六学年に学習する漢字を出題する学年別の読み書きテストを作成、実施した。〔対象〕特別支援学校（聴覚障害）50校に在籍する学年対応の学習をする児童生徒879名（小学部2年生169名、3年生163名、4年生120名、5年生147名、6年生121名、中学部1年生159名）。〔結果〕本研究の対象児は、先行研究（総合初等教育研究所，2005）の健聴児の成績と比較して、漢字の読み習得には遅れを示した。一方で、漢字の書き習得については、健聴児と同程度の成績を示した。また、誤答分類を行った結果、健聴児とは異なる誤答傾向が示され、具体的には、聴覚障害児における漢字の読み書きの誤りには、音韻的な誤りが多くみられることが示された。

【研究2】聴覚障害児における漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因と認知要因

〔方法〕①漢字要因に関する研究：漢字が持つ特性のうち、画数、心像性、一貫性、使用頻度、同音異義語数に着目し、漢字二字熟語180語の漢字読みのテストを作成、実施した。②認知要因に関する研究：WISC-IV、レイの複雑図形課題などの認知検査（18項目）を実施した。〔対象〕健聴児：中学校に在籍する生徒131名（1年生31名、2年生58名、3年生42名）、聴覚障害児：特別支援学校（聴覚障害）中学部に在籍する生徒41名（1年生14名、2年生13名、3年生14名）。〔結果〕①漢字要因に関する結果：聴覚障害児の漢字の読み習得は、健聴児に比べて遅れがみられることが示された。聴覚障害児における漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因として、画数、心像性、一貫性が挙げられた。②認知要因に関する結果：聴覚障害児における漢字の読み習得に影響を及ぼす認知要因については、18項目中3項目が有意となった。そのうち、1項目については、健聴児を対象とした先行研究で指摘されている要因と同様であった。一方で、残りの2項目は、聴覚障害児に特有の認知要因であった。さらに、構造方程式モデリングに基づいて、聴覚障害児の漢字読み習得のモデルを作成した。

【研究3】日記文からみた聴覚障害児の漢字の書き習得の縦断的な変化

〔方法〕小学校段階の聴覚障害児が書いた日記から、各学年段階で使用されている漢字の種類や誤用傾向などについて検討を行った。〔対象〕小学校ないし特別支援学校（聴覚障害）小学部に在籍する聴覚障害児5名が6年間の在籍期間に書いた日記7,199日分（A児838日分、B児1,709日分、C児1,621日分、D児1,700日分、E児1,331日分）を分析対象とした。〔結果〕聴覚障害児は、学年発達に伴い、使用する漢字の種類が増加していくことが明らかになった。また、1年生段階であっても常用外の漢字や未学習の漢字を使用するなど、種々の特徴がみられた。

【まとめ】

聴覚障害児における漢字の読み書き習得について、以下のような特徴がみられた。

1. 健聴児と比較して、読み習得の成績には遅れがみられた。
2. 健聴児と比較して書き習得は同程度の成績を示した。
3. 漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因・認知要因については、健聴児と同様の特徴がみられた。一方で、健聴児とは異なる特徴も示した。
4. 書き習得については、1年生段階で常用外の漢字を書くなど、小学校での学習内容とは別に、様々な漢字を習得・使用していることが示された。